



(菖蒲町から見える日光連山)

◎期日：2020年12月2日

◎メンバー：赤澤（単独）

この山に初めて登ったのは1959（昭和34）年6月初め、高校2年生の時だからもう61年も前の事になる。那須、大菩薩、赤城、丹沢に続く5度目の山は級友のMが付き合ってくれた。学校は埼玉県東部の菜の花畑に囲まれた片田舎、通学に乗る東武鉄道野田線は単線で大宮から千葉県船橋市までを2輻編成でトコトコと2時間でつなぐ長閑なローカル電車、学び舎のあるY駅までは大宮から凡そ30分、沿線は遠く関東平野の果に浅間山や奥日光、赤城、秩父の山々の連なりが眺められ厭きる事が無かった。

近くの男体山が女峰山と連なり大きく堂々としているのに比べ、前山の後ろに頭を出す奥白根山は小振りで無雪期はあまり目立たないが、冬期には真っ白となり関東以北の最高峰として存在感があった。赤城や男体が見えても白根は見えない日も多く、日光連山でも奥めいている事が想像され、初冬の朝どこよりも早く白化粧した奥白根山の頂きを発見するといつか登りたいと未知の頂きに憧れたのだった。当時の埼玉県は小麦の生産量日本一という農業県、大宮から先はずっと田圃の中で車窓から遠く地平線の彼方まで見通し良かったが、今や沿線は密集する人家に囲まれてしまって遠望が利かなくなったのは世の趨勢、仕方ないだろう。

2020年8月、奥日光湯元から白根沢沿いに前白根山を経て錫ヶ岳を目指した折に目の前に聳えるゴツゴツした奥白根山



(60年前の車窓風景に近い菖蒲町からの日光連山。

冒頭の写真はこの拡大版)

が印象深く、もう一度その山頂に立ちたいとの意が強まり雪の便りが届くともう矢も楯もたまらなくなった。

登山コースは日光湯元から中ッ曾根経由と白根沢経由の2本、他に金精峠、菅沼、丸沼高原からと主なものはこの5本、私はその後菅沼と丸沼から各2回ずつ登っているが、今回は菅沼ルートを進る事にした。93年11月末以来だから27年ぶりだ。あの時は新品のプラブーツの履き初めで、翌94年7月のマッターホルンに繋げた事を思い出す。

コロナウイルス感染を避け、前日は道の駅・尾瀬かたしなで車中泊、かなり冷え込んだが冬用寝袋で準備万端よく眠れた。夜中オリオンの下に蒼く光るシリウスをしっかりと確認。

12月2日4時起床。あまり広くない道の駅、車は自分の1台だけ。出来て間もない新しい施設でなかなか使い勝手が良く水も美味しい。ここから登山口の菅沼茶屋まで国道120号線を凡そ25~6km、暗い夜道を通る車は少なく慎重にゆっくりと金精峠を目指す。国道は12月25日から翌年4月23日まで丸沼スキー場から先は冬期閉鎖に入るので要注意だ。

国道はしっかり除雪されていたが、閉鎖された菅沼茶屋の駐車場は7~8cm程度の積雪でロープが張られ中へ入れず林道に駐車する。トイレも閉鎖、登山届のポストも撤去され寒々とした登山口、先行車が1台停まっていた。ここで夜明かしたようだ。

6時25分、沢沿いの林道をアイゼン装着せず歩き出す。先行者のトレースが1本ありこれはラッキー。気温は-5度、天気もまずまずでこれなら何とかいけそうと元気がでる。

林道はすぐ終わり、薄い雪の中樹林帯をジグザグに登る。持参の地図には「黒木の樹林帯、急坂できつい」とあるが、木の根、岩角に掴まり四つん這いになって登った夏の白根沢コースや武尊山・剣ヶ峰の急登に比べれば2本の足で立って歩けるだけまあ大したことないが、雪道はよく滑り、やっぱり厳しくて幾たびも膝に手を添えハアハアと息を継ぐ。

9時丁度弥陀ヶ池到着。27年前はもう少し雪量も多い中、2時間だったので今日は30分余の遅れ、アイゼン無しの同条件、この差はしょうがない。51歳、若かったなあと思う。

凍り付いた弥陀ヶ池の先にドーム型の白根山の全貌を仰ぎ一息入れる。途中5人に抜かれたが皆さんチェーンスパイクで、10cm程度の雪道にはなかなか良さそうで欲しくなった。



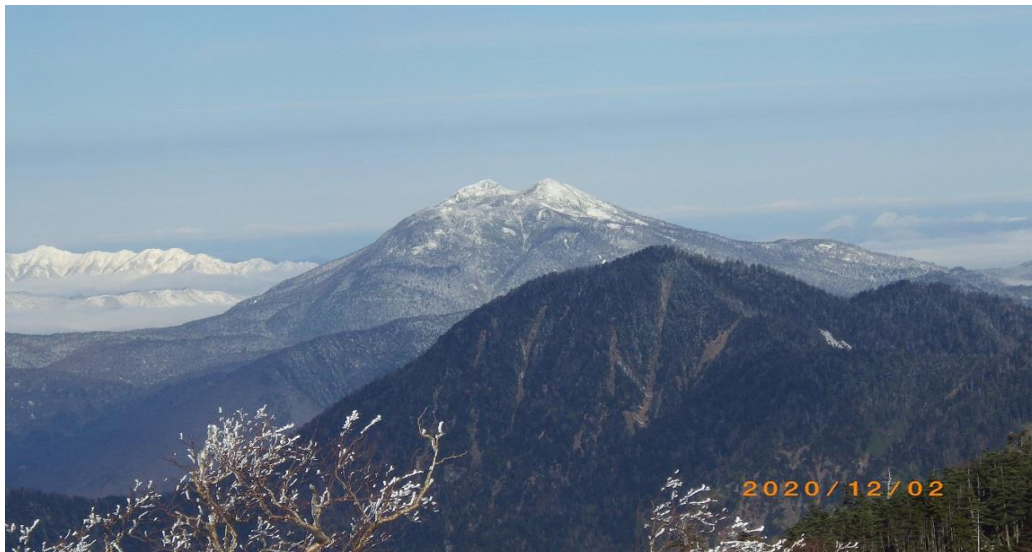
(弥陀ヶ池と白根山)

黒木の樹林帯はここまでで、ガレた岩くずの中を白根山と座禅山の鞍部を目指す。座禅山の山腹はシラネアオイの群生地として知られていたが鹿の食害で今は殆んど見られないらしい。この花に出会いたいと91年6月末に登った時も随分少なくて拍子抜けしたものだったから、あれから29年、まさに己ん



ぬる哉。

鞍部からはダケカンバとミヤマハンノキの混在する急登となり、よく滑ってキツイがアイゼンを出す程でもなく次第に開ける展望を愉しみながらゆっくりと焦らずに一歩一歩前へと足を出す。振り返れば黒々とした燕巣山の背後に耳二ツの燧ヶ岳が大きく聳え、その奥左手の白い連なりは荒沢岳でその尖がりに前嵐の鎖場が思い出され懐かしい。



(尾瀬・燧ヶ岳と左奥に荒沢岳)

やがて一面霧氷に覆われた灌木帯となり、先程まで見えていた青空は薄い巻雲が刻々と形を変えて流れだし青味が薄れて肌寒くなる。北面で日当たり悪くお日様が出ていればキラキラ輝いて綺麗なものと独りブツブツ。頂上直下の溶岩でゴツゴツした岩稜帯は凍りつき、余程アイゼンを出そうかと迷ったが面倒臭いし億劫だとストックをピッケルに換えただけで直登した。八ヶ岳・赤岳直下の文三郎尾根を思い起こす難所だったが、急登を何とか乗り切り岩峰の一角に飛び出ると強風に煽られ飛ばされそうになり一瞬怯んだ。



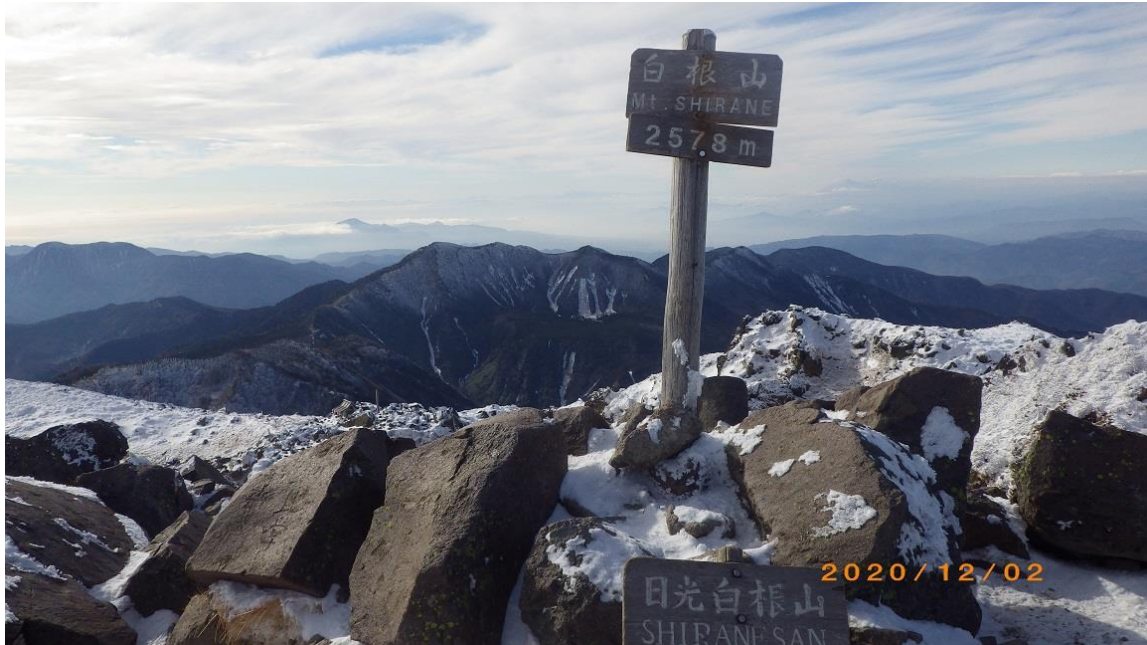
(樹氷と巻雲)



(頂上稜線)

深田久弥が「日本百名山」の中で「奥白根の頂上は一種異様である。蜂の巣のように凹凸激しく、どこを最高点とすべきか判じ難く、小火口の跡があちこちに散在し・・・・・・」と述べている通り小岩峰が林立し荒々しい頂上部を左に進み 11 時丁度頂上到着。4 時間 35 分は 27 年前の 3 時間半、29 年前の夏道での 2 時間半に比べたら自慢出来るものではないが、老骨の身まあこんなものだろう。筋雲流れる中、文字通り 360 度の大展望で男体山や中禅寺湖よりも先にまずは 8 月に無念の退却となった錫ヶ岳に目が惹きつけられた。何とかリベンジ出来ないものかルートを探るもかなり遠くウーンどーしよう。過去 2 回はいずれも悪天候でホワイトアウト、何も見えなかったのが長く頂上に留まり眺望をたっぷり堪能したかったが、風が強くて寒いので早々に下山にかかる。





(奥白根山頂。奥に因縁の錫ヶ岳)

下山は一度下って対面の奥白根神社のある岩峰へ登り返し、避難小屋、五色沼を経て金精峠に出る予定だったが、疲労も激しく火口湖の五色沼からは弥陀ヶ池へトラバースし往路を辿って菅沼登山口へ下山、雪山はいいなあと大いに満足して帰路についた。



(←白根神社の社)

(凍り付く五色沼⇒)



《コースタイム》

菅沼登山口 6.25—9.00 弥陀ヶ池—11.00 奥白根山—12.15 五色沼避難小屋—12.30 五色沼—13.20 弥陀ヶ池 13.35—15.05 菅沼登山口 所要時間 8 時間 40